

古事記読書会

「弥栄(いやさか)の会」

2021年度第2回 報告書

開催日：2021年5月22日(土)

9:30～12:00

開催場所：Zoomにて開催

参加者：6名(正会員)

内容：

(1) 参加者自己紹介

(2) 朗読

阿部國治著・栗山要編「第六集 天岩屋戸(あまのいわやと)」第12章あとがき～13章を、Zoomを用いて順番に輪読

(3) あらすじ ※これまでのあらすじは(5)を参照
第13章 おこもり

みかしこみの後、天照大御神は八百万の神と須佐之男命を呼び、機織女の死に至るまでの出来事の責任はすべて自分にあるため、天岩屋戸に籠ることを伝える。天照大御神の「おこもり」によって、闇夜の状態が続くことと多くの災いが起こる。

(4) 読後感

○「職業に貴賤(きせん)なし」という箇所が響いた。地方から上京した時に同様の感情を持ったが、今では建設現場第一線の人に対し世間から依然として軽蔑の目が注がれていると感じる。漁港の現場では漁業の仕事に対しても感じられた。教育の問題か？市民協働によるインフラメンテナンスの取組みで「インフラに関心を持ってもらうことが目的」ということにも通じる。

○機織女の自殺について阿部先生の解釈は、決して自殺が尊いということではなく、自らの使命感のあまり、斑馬墮し入れに対し「死をもって抗議した」ということではないか。

○科学技術の研究が宗教を阻害するのは本末転倒、ということについて、宗教だとピンとこないが、倫理・道徳であればわかる。技術は人の幸せのために用いる、ということに通じる。

○和御魂・奇御魂・幸御魂(にぎみたま・くしみたま・さきみたま)の各々がまだ理解できないが、大和魂の複雑さを示す概念だと解釈したい。

○「おこもり」は何故「許母理」と書くのか。

○天照大御神のおこもりは、責任者が修羅場を離れ問題解決から逃げると考えると疑問を抱くが、周囲を困らせようとした意図的な行為ではなく、もうどうしようもなくなった結果であるという点が重要。二宮尊徳が成田山に籠ったのも同様。○おこもりによって闇夜が続く周囲が困惑したことに、震災後の計画停電の時が思い出される。電気の有難みを痛感した。歴史は繰り返す。

○天照大御神が須佐之男命の行為に対しフォローする「のりなおし」を経て、行き過ぎた行為は自らの責任であるとする「みかしこみ」、その後「おこもり」へと続く流れは本当に良くできたストーリー。稗田阿礼が語り本居宣長がまとめたものを阿部先生が編纂したという事実感叹とする。

(5) 参考：第1章～第12章あらすじ(文責：小林)
「受け日」(うけひ：第一章～第四章)

第1章 なきいさち

伊邪那岐大御神の子：天照大御神、月読命、建速須佐之男命の三姉弟。父が須佐之男命に「ことよさし」として現世の国造りの使命(国土開拓)を命ずる。須佐之男命は移動中の困難に遭い、荒れ果てた現世を見て使命の尊さを忘れ、姉兄を羨み「なきいさち」状態となる。そこへ父伊邪那岐大御神が現れて叱り「神やらい」として須佐之男命を追放する。

第2章 まいのぼり

須佐之男命は反省し高天原にいる天照大御神を訪ねることを父に提案する。父は天照大御神の元で修行することに同意し立派な「まいのぼり」をするよう命ずる。須佐之男命は「みたましずめ」をして立派なまいのぼりについて覚り、現世のあらゆる穢れを背負って正々堂々と高天原にまいのぼりっていく。

第3章 いつのをたけび

天照大御神は須佐之男命の反省を大いに喜び、ひかりの神としての威厳を示し弟の心を完全な状態に整えるために男神の姿（Ⅱいつのをたけびの準備）で迎える。須佐之男命はそれを受け止めてさらに反省する。天照大御神の光を受け須佐之男命に怪しき心が無くなり清明心になっていることがわかるが、天照大御神はその証をするよう命ずる。

第4章 うけひ

須佐之男命は天照大御神の「おひかり」に包まれ御魂鎮めを続け、無色透明になりただ「おひかり」だけになる（Ⅱうけひ）。天照大御神はさらに第二の証を立てるよう命じ、須佐之男命は御子を生むことを提案する。

「勝佐備」（かちさび…第五章～第十章）

第5章 あめのやすかは

須佐之男命は受け日の過程で見事なひかりの流れ（Ⅱあめのやすかは）を発見したことを天照大御神に伝え、天照大御神はそれが須佐之男命に見えたことを大いに喜びそこで一大事業（Ⅱみこうみ）をすることを提案する。※あめのやすのかは…課題を背負っているものの「いのち」本質

第6章 あめのまなゐ

須佐之男命は「受持ち」である現世の開拓を急ぎたいと考えるが、それに必要なものを天照大御神から問われ、「手」「太刀」（Ⅱ十拳剣）と答える。「なきいさち」の頃は「殺太刀」となっていたがこれを「生太刀」とするため、天照大御神は「あめのやすのかは」の中に入る。その中の「あめのまなゐ」で禊をし殺太刀は生太刀となる。

第7章 いふき

天照大御神は「あめのまなゐ」において生太刀に息を吹きかけ（Ⅱいふき）三人の姫御子が生まれる（Ⅱみこうみ）。

第8章 やさかのまがたまのいほつのみすまるとま

須佐之男命も「みこうみ」をするため、十拳剣に代わるものを天照大御神に求め、天照大御神は「八尺勾玉之五百津之美須麻流之珠」を差し出す。須佐之男命はそれを受取り、「あめのまなゐ」において「いふき」を行い五人の彦御子が生まれる（Ⅱみこうみ）。

第9章 みこのりわけ

三人の姫御子は、須佐之男命の生太刀を「ものだね」として生まれたので須佐之男命の受持ちの協力者であり、五人の彦御子は、天照大御神の珠を「ものだね」として生まれたので天照大御神の受持ちの協力者である。八柱の御子達はそれぞれ自分の名前の意味と受持ちとの関係を申し述べる。

第10章 かちさび

須佐之男命は自らの受持ちである現世の開拓に参考となる高天原の調査と勉強を始める。農業等の修行と研究に熱心に励むあまり自分の考えを試すようになり高天原の神々と衝突してしまう。

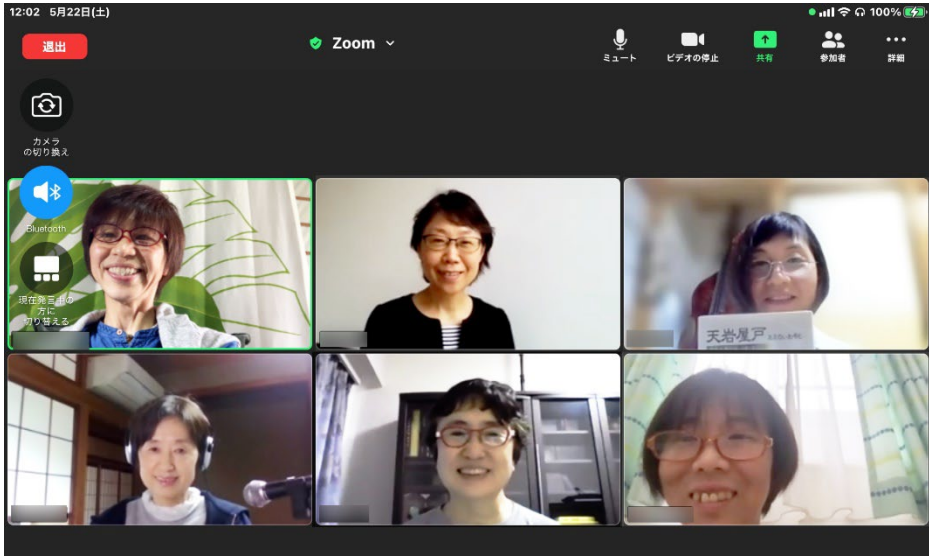
「天岩屋戸」（あまのいわやと…第十一章～第十三章）

第11章 のりなおし

高天原での須佐之男命の行為について神々から天照大御神に苦情が殺到する。天照大御神は須佐之男命をとがめず、神々に対して、須佐之男命が自らの受持ちに熱心なあまり他が見えなくなっている状態（Ⅱ勝ちさび）であると伝え、須佐之男命の気持ちと行為に根拠を与える（Ⅱのりなおし）。

第12章 みかしこみ

須佐之男命は研究のため斑馬の皮を逆剥ぎにしさらに神々の反感を買う。天照大御神から命じられ斑馬を持参した須佐之男命は、天照大御神が機織りの最中で入り口が狭かったことから、御殿の屋根を壊して斑馬を墮とし入れる。天照大御神に仕える機織女は神に奉る織物が斑馬墮し入れによって穢されたことを嘆き自殺する。天照大御神は責任を感じ天つ神に長い祈りを捧げる（Ⅱみか



読後感をたっぷり共有した後での記念撮影

しこみ)。

【次回予定】

2021年6月19日(土) 9:30 ~ 11:30

※次回はZoomにより「八俣遠呂智(やまたのおろち)」を味わう予定

■参加申込方法

開催日前日までに、下記必要事項を記入の上、メールにてお申し込みください。

【必要事項】 所属支部、氏名、緊急連絡先(携帯)

【申込先】

reading-circle@womencivilengineers.com

(担当:小林)

以上